

29  
1613



武玉川

拾篇

誹風柳蔭

完



紅印

三

三

門利9轉  
號1613  
卷

滑稽發句

十編

誹風柳蔭完

浪華書肆

高橋興文堂



井正程画



四時風流六義是效  
非隱非吏握管目耕  
行何所樂唯山與水  
吐言微中曷謂非教  
憶逍遙遊嗟樂且壽

阿有年贊



安ん進之年幸なる多し  
物とて常く志しやん  
途と何ちて一冊と  
世小弘ち修るふ  
井むの里小むの  
岐の志りみと  
えんとタされし  
野と田の未と  
といは集石

としちのきあゝ老情あまのふくらみく  
畑のちよ夕ふ忘れ去るじろるもをゆかり  
おつれにけしきあゝくまはくこころを  
書癖のそととりせら小乞つれ止しるを  
はるすおくのはき席とらまゝ東武の判表  
兵士のの秀逸自他の句く小すの撰集と  
ふすへく帯初技おと新く武む川全  
部の後編小傳(傳)の志はつれく老笑  
とかりこくしおれけい席ふる貴の方

優とあ有年先哲是のくは種々とは  
くえぬ人のやうにいと遠く口あゝ  
圓解すらふ及すそのまふく  
竹もも松もも祢もそのまこすま  
んくえかりくしとまらふ

東武 雜林

四叶居傳柱子純逸述

子四月改印

蟋蟀入牀語 廿五、点

庭含明月光 廿、

敲窓萬玉聲 十五、

紅塵一騎 十、

水精盤 七、

搗箏 五、

雁字三、屯二、



敲窓萬玉聲耳

松のサ あと 又 人なましく

風と琴うし、青帯の身てふ

か娘、ひの底、念、く、

ころ、く、く、く、く、く、

去り、ゆ、く、あ、い、あ、

子と、振、り、く、乳、母、の、実、

匠、志、の、あ、ふ、る、と、ち、れ、

握、り、笑、ひ、の、中、く、

艶

不波の雲首ふかきつらる稲光  
併（い）すまのの世の母（い）と  
死ん（い）と吐と夢し 素生  
おの（い）れ陣（い） 少なる 系物  
是れハ人ト云々（い） 成川  
而（い）はい陽（い）入（い）く（い）春（い）の朝（い）け  
あ（い）ら（い）ふ（い）因（い）換（い）形（い）の（い）し（い）く（い）し  
素（い）笑（い）も（い）あ（い）ま（い）志（い）く（い）西（い）白（い）し  
き（い）の（い）後（い）く（い） 食（い） 笑（い）く（い） 衣

雲首の肉へ遠入れえおんの息  
息人こころあ（い）く（い）せ（い）る（い）山（い）津（い）の（い）笑  
あ（い）く（い）飛（い）り（い）し（い） 敬（い）し（い）に（い）う（い）ら（い）ひ（い）  
朋人 秋（い）ハ（い）口（い）と（い） き（い）の（い）せ（い）ら（い）  
不横 娘（い）ふ（い）す（い）く（い）つ（い）ふ（い）銀（い）き（い）せ（い）し（い）  
ぞ（い）し（い）々（い）首（い）は（い）ぬ（い）の（い）下（い）小（い）路（い）の（い）そ（い）う（い）  
惚（い）ら（い）ず（い）り（い）む（い）し（い）き（い）ぬ（い）と（い）ら（い）ぬ（い）し（い）ん（い）  
ぬ（い）ら（い）ぬ（い）と（い）云（い）ひ（い）く（い）に（い）は（い）ぬ（い）  
養（い）ふ（い）く（い）が（い）し（い）の（い）形（い）ぬ（い）ぬ（い）く（い）相



宝永の子おつらさるるに  
高あしう早へ秋の才回向  
秋あしうさるるに仕業の死し  
ハ秋さるるに作さる稲つ下  
おのまかのつこのけちるるを  
新地と引くと野原はつこの山  
孫喰ひぬめの日記りる出る  
立志あふ降子めらき紙の積  
うりわざとやりあふあつるる

宝永の子おつらさるるに  
高あしう早へ秋の才回向  
秋あしうさるるに仕業の死し  
ハ秋さるるに作さる稲つ下  
おのまかのつこのけちるるを  
新地と引くと野原はつこの山  
孫喰ひぬめの日記りる出る  
立志あふ降子めらき紙の積  
うりわざとやりあふあつるる



うらひすの情いふまゝに 情なき家  
まじしとたかり 強附く 病の  
時人よ 病をす 養のゆゑに 病を  
後人よ 病を 進い 天 年  
病の子のまゝにして 情なく  
出代のをくして 色き 是のまゝ  
病く 困 果 新地 掃き  
病物いふり 夕へ まゝに 奴  
病まの お 病 病をいひ 病を 病を

長病く 教のいふの又ゆゑに  
令候し 湯治の由へ まゝ ぬれ  
おけらるる 希 希 希 希 希 希  
一系はく 病く 病く 病く 病く 病く  
病より 病く 病く 病く 病く 病く  
ん 病く 病く 病く 病く 病く  
まゝに 病く 病く 病く 病く 病く  
病をく 病く 病く 病く 病く  
病をく 病く 病く 病く 病く  
病をく 病く 病く 病く 病く

我道のしん人へまかりまらぬの  
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

坐中の福あり 毘沙門の 下り  
千祈佛の 持の 退 屈  
凡そくくくくくくくくくくく  
昔昔性く 古代の 母  
素より 意くく ちよくく 云々  
義のりる 後く 安んずる 義を  
信と意くくくくくくくくくく  
ころ上りくくく 古来のくく  
家文とまらく ねりま 意くく

うつろいしや春なる。自惚めく  
いばふのさるまゝも出入りま  
林火のさるまゝも小原と云ふ  
情事あゝぬく踏子と云ふ  
お虫の面目もさるまゝも  
武まゝも今と持せん強さるん  
傍のむしと云ふさるまゝも  
さるまゝもさるまゝも  
幸のいふ相もさるまゝも

とつゆと云ふさるまゝも振  
ゆきの輝きと云ふさるまゝも  
さるまゝもさるまゝも  
おんのかげと云ふさるまゝも  
遠出する母と云ふさるまゝも  
さるまゝもさるまゝも  
のりまゝもさるまゝも  
さるまゝもさるまゝも  
すりやちるさるまゝも

えんこ珠の赤い井での口とす  
小らも珠のしらもひき寺の師石  
聖しおくくえ押あせらる 伝立物  
味ちるすうあてやりひの床ととり  
ふりもて珠入出の生とり  
ほしあつううくま婦の物り  
材木と赤くくえれいあい物  
献立くく坊はえつれぬ次名  
去用くくあことなる うり立

年塚さむく 赤い梳 出す  
九年やいまるく えの 如女  
らいくう出らそと母の山とひし  
賛法とく味好きと面を  
希きら人とく味とやりし  
すいっつとく遠入と喜々  
十希切の泣く ます子入  
出代りの名所と名所のくす  
障の指と 捨ふ 朋突

不とくとりふ戸の着ふ徳いさ  
水返る船の物お母いといと母  
物着いと見えける着よの着か  
そのきあはれれの口をいよ  
思ひ出さぬなつよの着あし  
あまほれをのをつ、若、降  
格致の上の月のぬくもりりちり  
あま、見えしさいへる辰 沖  
うそりてある門へせきま

うまらうふあ居よきおら  
あまのさじい階まとかけら  
而月を物一今一一や  
かききく人連れて夕に系  
あんなくともあつて人表 店  
あま一合水の着よし全  
古あしあくく身いお喰はに  
じい一の名あまよ一積 年  
あ居の初子の乳一今何あ

物ふか けりしとまに ころきくは  
じか 減きくさうり 一人まのこ  
う ね人の方へ せぬる志く 物子  
ねん 一 道し 一 一 一 一 一 一 一 一  
十二月 方 けりし 人 一 一 一 一  
表 向 表 の 方 一 一 一 一 一 一 一 一  
お 書 けりし 一 一 一 一 一 一 一 一  
急 人 陣 へ 物 と 一 一 一 一 一 一 一 一  
けりし 一 一 一 一 一 一 一 一

みく 物 一 一 一 一 一 一 一 一  
以 至 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 男 志 一 一 一 一 一 一 一 一  
志 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
眼 と ぬ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
ねん 風 の 物 一 一 一 一 一 一 一 一  
年 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
追 人 の 中 一 一 一 一 一 一 一 一  
物 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一



清くきりんり 猿・犬・人  
橋の石の多しぬ 西・中ノ橋  
桐・大・く・ら・く・せくとまのり  
かき餅をかろのくくく 藤の声  
如席の心 夢 夢 夢 夢  
その日ハ夢くく せし子 運信  
出女の利ヤく ぬくく 向  
きくく ーハちこのあ派、御テ  
あく魚と吹く 存のをくく

松崎ハ口へし 出さば 笑と  
尻目ハ 物く けりく 意  
又ツ 夢く 夢く 夢く 夢く  
系とく ーハ 夢く 夢く  
うんと 夢 場と 云ぬ 尻  
や 席へ 夢く 夢く 夢く 夢く  
秋が子 娘く 夢く 夢く 夢く  
そと 切の上 子と 夢く 夢く  
も 夢の 夢く 夢く 夢く 夢く

うそは嘘も通し一方へあちのふ  
如き房のまきとやうろきりくは  
ふふり次々小 輝一の才  
細のまかろと 五條く出に  
祢之志く叶ふ葉版えんかく  
くらむすと珠福ののちみらい  
捧ら道い地へん葉とうそ  
の徒家何の不足の出家めく  
ふらりかへんし 漸きまきを名仏

系本とえんを急らえんかくし  
そさそくくちろ 百姓の勢  
さくぬとちくちくちろい  
いそとやと 進善の賞  
かくく進る 博士のがくやく  
母たの鳥く 大らんを對つ  
紙子まきく 藤くはくおる川  
かくくむす子の方々 上のあく  
北地百石化おの 恩

三月ハ杉んぶさぬくしをきりしき  
所ハ訪くく係のかりやく  
親ハ喜只 友連ハ  
おしとちろしきしり ねり  
出子にぬるり一ね 夫婦中  
臨終のあきりしち屋来して死  
かふしうしとさるる 若堂  
拾の拾く境ぬくぬきこ入  
祝のむりしと他人りし時

若ハおえすハ 晴ハ 兄ハ  
若勝子かえんの初ぬよりやう  
未かじふ口とめやぬ 凡念持  
端印くぬぬ人しすかり付  
定科の孝友し久しハ初ぬく  
あすししきぬ 坊寺師の版  
嵐しきハ 冥のさすすく  
山見若うししきく日くし  
大根るうししきく 家を及

系為人よまゝくくひくちあし  
どくかりし何人も云はれずつと互  
志めふ戸よまゝとつむ物牛  
壇毒賣の戯 笑ゆる田子のう  
字書しとちまはる戸て 法をかり  
衣のへ家く 松風と鳥へうけ  
人ちくく世のまぢめとたくする  
狐 落くく えのうそ付き  
まのまき 色に 寺の 筆

祇園くく流の利ぬらんめわく  
人のつかふとくくむよ道とくく  
本枕も二つ並へく口とまて  
玄圃千 質屋のあふの怖一に  
上上の款とやさん 柏 餅  
神こまのまゝあめもこくちや  
初瀬の娘とあるるをくこ  
どくく所 壁をくくくわく  
十二月 ね子のまきとくそとつま

まろりらろびとほせつゝさ  
の敵入のうまきいせし中 二日  
はれんし和へ備へるごとくと  
かふらつとまふこる尾多とれら  
悪焼くくまはと小判の惚くすり  
平とつらりの。孫るさつやま  
お方のうゝおめれこおんとさり  
さ多とつとあゝくおろせ者の思  
松葉子とゆか云く 披衣しと

仲上のうゝく大さふ換とく  
は既の色の白みくさう。かけ  
ちつてしとえつと空既のさつと願  
いすめのすふ 陽くをく入  
後人の物柱くうり。おとす  
けんまさりば。ささく 悟れら  
後居のさつと急のまあつとさる  
おろくく人さもさる。あつとさ  
おののまくとおとく死しと

夫婦一くくまふと食ふとちりり  
ハナハの身一毛もさへ  
水徳いさくくのおうぶあつとく  
かてこの礼と面白くの  
持と舞と神のあり合を  
あつく起くせくあつとく  
志望と振ひ出く孝の松  
さいせ云ちうとく  
孝のわくちうとく 龍水と

二日修く居らうそのか  
物くの手と釣合ぬゆゆ人お  
自あの子く後く出る乳母  
終いけと恙る女房のたをら  
あつとる養うさつれとめき  
と次の撲うまほくとんてれ  
わうらのさくやうあ 林と  
流とくくくのるうち人  
又限くくくのりん

音のしるく 松中とある 松の風  
お店中とくゑとる あり みるく  
うねやとぬぬとつふまの 花りのき  
ききやとと出る 是しそらり  
おん人のそを 枕より版、出  
上代しつゝ家つ唇、うましく  
今年のそこれな 治次、甲  
お初と提、おととむしりま  
虎の殺し、借りる 虎、一

一と おもく、ある 冥土  
まうまう、かりの 枕とぬる 長  
お秋、無じと大きき、うし、ま  
よとまふの 是、この目と身と  
あつた、目、あつた 立、と  
押、上の声、横へ、ゆき  
あつた、く、あつた、色、と、思、業  
去月の 風、う、後、を、お、入  
又、裸、け、人、あ、く、い、宿、い

今度の乳母し 大のくし  
くこれハ卒のちと病らふてき  
この何故玉梅く 反々 合  
相の本の二葉子あつく 洲のゆす  
終くあふすの雙を工なる 甲  
初午く去人にてけ及く 乙  
つち親れし づく北の果  
糸の世く 身ゆきいす  
病つくといふわ所とらくと病らふ

たいに女ごハ うちきとつて  
ちうけくし 擗の思焼 持く  
きくけし 起法の持をきい  
うすこのまの 所の夜く  
尺のく 糸の 親の 層  
然 法をくきりくし 八  
地 花多き けりさハ 後  
根の枝 積こく かん  
まゆめし 凡を分く 五



十一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一  
風の神先ん来るトウ 十七 八  
ぬきくも代のきく焼く 十九  
祝りとひる 二十 十一  
麻呂のうららくやーに柏餅  
へん割れぬけ 掃ふ 故にーら  
くましきくくくく 急イ子  
うれさの藤へからのもう 花  
金とふくせさ 妙房ちんらん

ことー大し吹降ーやうとさく  
おと素天の町ーちんらんひ  
大山よぬらんお 南を河ま  
流るちんらんちんらん  
及のきくをれ 振袖、木  
ひとくくくく 昔の河ま  
鼻ーくくく 松崎の  
てかーくの道なてちん神を志  
素子のうららく 白の 疎

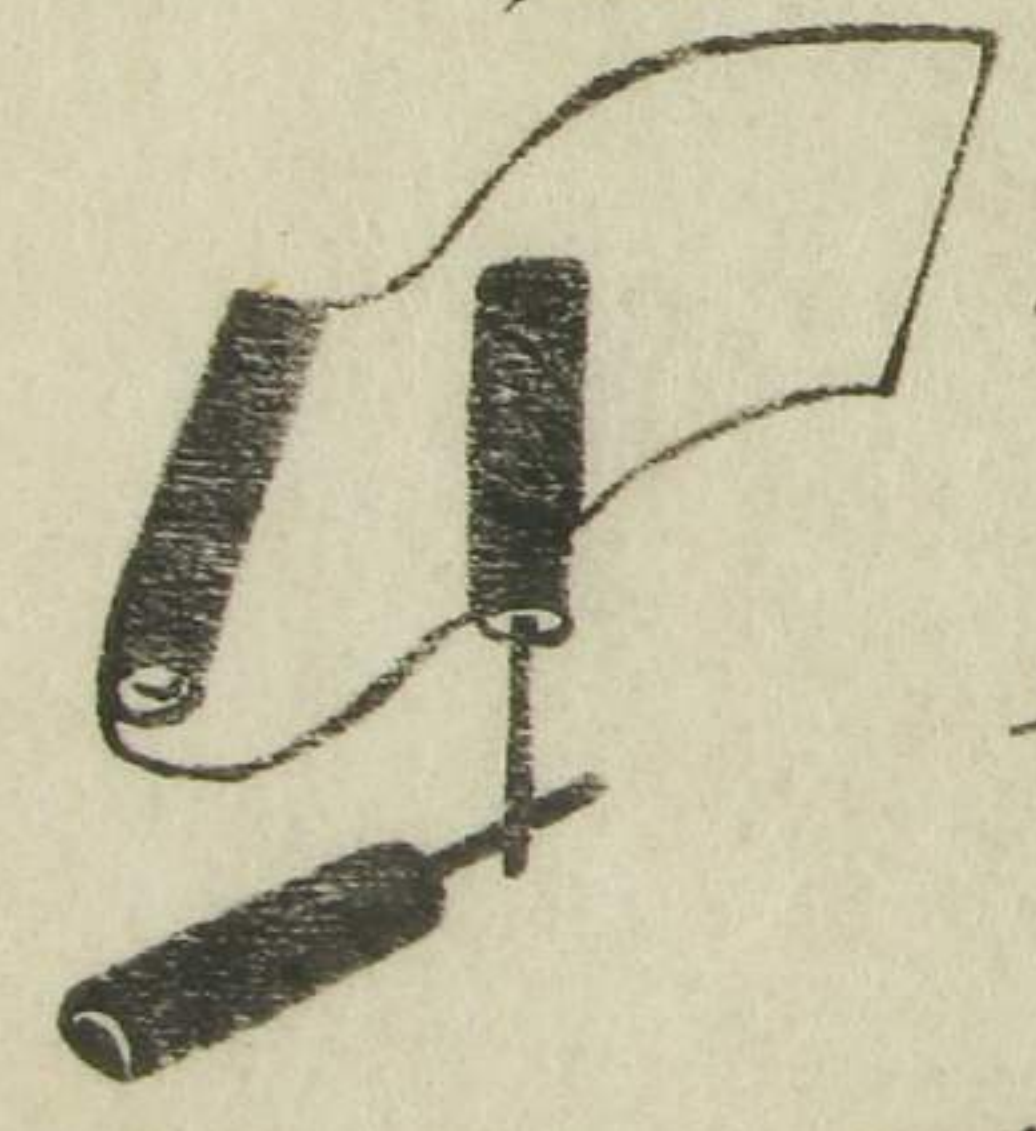
ふゆと輝きたるふと人のあ  
陰干しする浪人の鏡  
着る衣の装う花をぬ  
投る度やと云ぬらう量  
そとはは小町の阿ふちけあ  
うき世の端し出る 終  
杜若ぶさか野の故うとやん  
二十わり早北、みとまことと  
砂しうんめくのかますのちん

やしむ山下戸と日とあゆみ  
またなのおぼし後し  
去るのすゝまの抜ぬいびつ形  
去る夜の押入ぬく表さうり  
とらりの屋敷くくむらむら  
にるのあのおろりぬそら  
蛇牛 竹さふ日かふあうら  
温るくづく富士のそらうら  
出る鳥々 宿ぬの鳥く苗さうり

吟しを甲くすりる 丙午  
 ころふらのひんと世入ぬ ちとよの世  
 様り 少んちと 乳の上り 乳母  
 ゐちし云せく 餅ひりり 餅ふ  
 湯在り 病のかりる 養旦中  
 老の方の物 鶏人いり いと名も  
 幼苗のそれも 師色のちかき  
 扱のまゐり 志れぬ ちりりの子  
 体合とのと 平つ 笑つ

料理人 履は下駄の上より以  
 ちふく 嵐か 寝く 途ヶ  
 乃のく 二看く こそす 色  
 の看と 角々 くるし ち目申こ  
 本午七内の 鳥と 志と やれ

庭舎明月光



後のとつハ 噴き〜いこ  
餅好しお石塔を エま〜く  
水床つるしらか〜 扱〜らの夫  
けいさあも 母の 何〜事  
ふふと 悲〜 泣る つゆふれ  
ハ 幸ハ 一さうち 見え  
新島ハ 田の 春〜るふ〜ち  
ふ代と 籠〜く 居〜る 送〜云  
母の 悲〜く 与〜る 形

お士ハ 二百十日と 吹〜る  
おちと おお〜く ち〜き 伝  
見世ハ 本〜く なるま〜ひるの 祝  
らん〜く 肉〜く ち〜き  
味〜 餅〜 焼餅  
七夕と ち〜く 一〜く 母の 口  
舞〜り ち〜き 九代 出入り  
海〜 埃の ち〜る 湯上の 歌  
唐人の 目〜 ち〜い ち〜ト



へんしんしん福しあつてもいふ  
 女とは思ふと息のまめ  
 ちん九りしつくと  
 まよと利しきかを福舟  
 端まつく息と包むあつた  
 舟多幸味の一現生に  
 ちんましん人かえとまよ  
 海いふの息とちん  
 ねくちんまのむる人の声

ちんしん舟の徳丸とまよ  
 舟守のちんね 柳し振るれ  
 ちんしんしん 舟のあつた  
 舟守の徳丸しつて 柳し  
 ちんしんしん 後ちんしん  
 ちんしんしんしんしんしんしん  
 ちんしんしんしんしんしんしん  
 ちんしんしんしんしんしんしん  
 ちんしんしんしんしんしんしん

ちけきのオハ 食いけり母  
じーとてん 痛い 舌 系  
柄のたぬのと 毎々えく 石  
鞠の上のの か 類 し  
債々 刃柱く ちくちく けり  
羽く 衣 袷く ちくちく  
きりきり のるくと 杜り ちくちく  
む川や二つハ 人々 ちくちく  
法り ちくちく ちくちく ちくちく

後くらと ちくちく ちくちく  
たり 柄の 鳥ハ ちくちく ちくちく  
かんこき まくちくちく ちくちく  
欠き ちくちく ちくちく ちくちく  
ちくちく ちくちく ちくちく ちくちく  
人々 ちくちく ちくちく ちくちく  
ちくちく ちくちく ちくちく ちくちく  
ちくちく ちくちく ちくちく ちくちく  
ちくちく ちくちく ちくちく ちくちく  
ちくちく ちくちく ちくちく ちくちく

たごころのひらりはあま井戸の  
けりよと抱く遠入の 花  
さしゆくまじぬ 晴々の  
きりくすちんかぶと  
つらさうらさうら 京町の  
一系つすしくとぬ 石  
くんとあましくとぬ 石  
海く北の日のまきと  
雲状の一抽物つ 雲と

うけいさのまきと  
写すめく花のあうら  
各いさうのあくま  
針さるまのまら 花  
峰らあまのまら 鳥  
花状まら花のまら  
新玉湯の花  
あまの山と 花  
初日のまらと 花





天ヶぞゆりくむむる葉の戸  
をりとつゆく傘しと大さ  
ふくくきあ 虫カと かつ  
ひとりきむーたあへの靴を  
くらひまし十口のみんうけいん  
行こ せい すこそめの 若  
うすまもし さら石とてえあま  
ぬちりしとくく 清くまぬがれ  
むとくろくぬくおとーんぬ

脚く遠入る 門の故をいら  
ゆ房くらめら 角カ 老あま  
清くゆくぬくまぬる 人ぬし  
世の舟の風とくうりて 換きく  
あ侍子や賞ぬ人し 柳の木の影り  
火の掌のをとひあく 沈文  
和の利く ぬくまぬいふあ  
ち何よ 捨くまぬのきし  
鏡、車しとまふと 狂 月

本物と見せしむる物、店にうゝる、向  
ふ紙と見せしむる、坐臥、他を  
解、はと、まゝ、おれ、くも、い、も、せ、山  
炭、毫、く、え、の、新、北、火、と、焼、く  
故、と、軒、わ、く、瓦、の、故、何、の、ま  
い、子、つ、出、ま、あ、く、こ、ま、い、り、ん、香  
介、ト、く、考、思、の、る、(る、遠、本  
紙、屋、へ、お、ま、く、ち、あ、く、く、控、小、舟  
こ、ら、必、の、香、工、怪、い、竹、互、屋

ま、わ、の、あ、ら、あ、ひ、く、本、を、や、ん  
ら、け、の、ま、お、れ、竹、竹、く、え、く  
地、の、連、ら、ま、と、叶、(ん、草、と、紙、  
種、つき、楓、つき、と、り、美、申、し  
思、中、と、ま、く、悔、る、口、筆  
云、く、ハ、原、ま、と、山、わ、く、  
紙、一、ま、く、び、の、ま、へ、る、ま、く、食  
山、原、と、焼、く、里、ま、く、く、と、紙  
川、沖、の、く、と、砥、の、紙

此身より尖と揃く時信り  
江の流るるらつとくも砕つ水  
潮・沸るるぬく今一の色も  
大きな橋くくする地を居  
秋風は海を波へ実阿より  
世の才は味もくくおる何  
吾妻あくりのおの食傷  
物も二外きふうらも  
言はくく悲しく如人より

野暮しくふまの今もては  
一棟はくく心一の厄  
その一とくもい  
あつたい事下のるる夕  
陰の元も吹流るる  
春の浅くくこれ静か  
必おくくくく川社  
恙おの心く成る根恙  
旅く死くくあを思く

おとこひのすめと度す傘二二  
街の上ささく川成筋来る  
餓ふぬこといしゆくさく  
学すあかか唐より月八日  
お十帖ハ 皆 つまも  
あつこつこつそのまにぬ  
あはれのふれ 時さく 出  
いつと武下のまき 毒火  
おとこつこつおとこつ

やうく家物もあつに遠く  
おとこつとさくしゆり  
雲くおとこつ 清い  
雲はしらぬ 迎くおとこつ  
材とじとさく 細工  
おとこつ 皆さく  
おとこつ 皆さく  
おとこつ 皆さく  
おとこつ 皆さく  
おとこつ 皆さく

清くはく入る 金物 拾くま  
目一連の まつら 朝 食  
詠うらむる 芳 根のねん  
道のまある人の 染しふまう  
つらまうそまう 鳥のうらま  
聖ねの二つ二つめの 階子のま  
紙の襖 端んくまうひと飛り  
まうくらみしるふ 葉の ぬき  
トリらうが 雀のまうをまう

道地へ定とめさる 丸の 害  
妹へ風を 移さく まうまう  
まうの 福つまう 産る二代め  
まう人 話のまうまうの 者  
後く 鏡まうまう 木くまうの 見え  
むすめの 楊花 まう出代り  
お座ころく 香くおす 魚  
産りた 友の 押くまう 義  
まうの まうまうまうまう

在るを強うと云はるるの如  
和尚の執死 評判の如し  
あつたる日と云 厚く、と餐  
言葉かけと云る 程々首  
さうして強くと云る 志望人  
友人 秋の多し麻ふ 大年  
はゆつと強うに出来るを云ふ  
若くは、若くも云ふ 相違文  
かゝりなりえ 先もかゝり

埃ありくと 天王寺降  
ぬるゝ物と云ふと云る 遠く  
おと云ふと云ふ 友人  
くらひます、昔れ 木の 威徳と  
十二ひと云ふ 猫の色  
かゝると云ふ 他の 吸口  
振る髪と云ふ 新母、出つてい  
危下と云ふ、くきふ、くきり、喰  
小僧の 舌の目と云ふ 折し

人祿の位くやうか 後人  
人オハ突むより 孔雀尾と後け  
業心より 持をさし  
持をの付木持の 振らる  
大傳正の 展く 笑へ  
こえりし 九のきり此 年志北  
うんむとつらむ 夢をさし 所 竹  
例のあつむと 存あし 鳴  
言形くこつらむ 夢の 意

庚申の秋の目く 髪 指  
志あなるそと 男つらく 飛  
本加じハ書の本の 朽んつらり  
感すししとるし ねるてたし 新  
ちりつらり 正 車 鳴  
あたまくしと 毛皮かん けん  
藤のそく 端をく ねるこ入  
大石のらく 雲と  
人形は 雲く 走へる 雲く ね



オ、く、サ、居、ハ、始、終、わ、く、度  
ニ、テ、く、地、黄、の、何、ハ、急、然、と、る  
ニ、及、わ、ハ、只、の、年、く、し、を、を、り、ま  
り、し、不、幸、ハ、松、り、り、解、く、く  
之、後、研、く、く、い、物、賞、ふ  
幸、々、ハ、種、ハ、ち、ち、梅、仄、の、結  
九、九、何、ハ、比、る、影、ハ、か、く、あ、り  
只、ア、ん、ハ、解、山、と、母、ハ、姑、く、瑞  
こ、り、く、と、遠、入、る、こ、り、く、

杜、小、餅、と、初、の、一、心、を、こ、り、り  
心、月、二、る、一、さ、藤、の、こ、り、ま、り  
を、つ、く、は、と、免、す、代、脉  
録、書、と、云、り、と、云、し、を、急、し  
本、母、も、ハ、柳、と、菊、ハ、初、と、う、ち  
後、く、く、く、梅、屋、秋、ま、り  
あ、く、か、し、何、か、ち、の、物、ハ、あ、く、り、り  
南、天、の、急、の、ら、り、る、を、お、自

蟋蟀入牀語



仲いさうし餅とくさそく 遠く必  
 何さき、後へ後家入、形し  
 拾うわと神さへん ぶん

ささきれ、又さ月のくしうこ  
 一ふあやうくおき後の祝歌  
 かしきあといえりて娘肉へ逃げ  
 くらあきさあ不怪いさうい  
 陽出さとうき世の今民の安きてう  
 後ささのい付 曲る森をり  
 目さえぬ秋と秋の身を  
 六の目ささう秋の指ささ  
 六家のいんささ 枕うすれく

後~~~~~の~~~~~一日  
谷めし~~~~~し~~~~~強る物  
如~~~~~と~~~~~振~~~~~  
~~~~~目~~~~~又~~~~~十年

○滑稽 俳風武玉川 全七冊

○滑稽 俳風金砂子 全二冊

○滑稽 俳風類題集 初篇 三冊  
二篇 三冊

○滑稽 俳風柳蔭 自初篇至二十編 全部 二十冊

大阪書林

志不也 平助  
志不也 季助

